

令和8年度（2026年度）

病害虫発生予察情報 第1号

長期予報

北海道病害虫防除所 令和8年(2026年)3月31日

<http://www.agri.hro.or.jp/boujoshou/>

Tel:0123(89)2080・Fax:0123(89)2082

気象庁発表の2月24日付の暖候期予報および3月24日付の3か月予報は以下のとおりです。

北海道地方3か月・暖候期予報 (4月から8月までの天候見通し)

暖候期 令和8年2月24日

3か月 令和8年3月24日

気象庁発表

<気温の各階級の確率(%)>

4月	10	30	60
5月	20	30	50
6月	20	30	50
6~8月	10	40	50

■低い

□平年並

■高い

<降水量の各階級の確率(%)>

4月	30	40	30
5月	30	30	40
6月	30	40	30
6~8月	30	40	30

■少ない

□平年並

■多い

春（4月）：北海道日本海側・オホーツク海側では、天気は数日の周期で変わるでしょう。北海道太平洋側では、天気は数日の周期で変わり、平年と同様に晴れの日が多いでしょう。

（5月）：天気は数日の周期で変わるでしょう。

夏（6月）：天気は数日の周期で変わるでしょう。

（6月から8月）：暖かい空気に覆われやすいため、夏の気温は高いでしょう。

令和8年度の病害虫の発生予想

注1) 平年値(過去10年間の平均値)と比較し、◎: やや多～多、□: 並、△: やや少～少を示す

注2) あぶらな科野菜における近年の発生状況はキャベツでの発生量

作物名	病害虫名	近年の発生状況					本年の発生期・発生量	
		R3	4	5	6	7	発生期	発生量
水稲	いもち病(葉)	△	△	□	□	□	やや早	並
	いもち病(穂)	△	△	□	□	□	やや早	並
	紋枯病	△	◎	◎	□	□	やや早	やや多
	縞葉枯病	□	□	□	◎	□	—	やや多
	ばか苗病	□	□	△	□	□	—	並
	苗立枯病	□	□	□	□	□	—	並
	種子伝染性細菌病	△	△	△	□	□	—	並
	ニカメイガ	△	□	□	□	□	—	並
	ヒメビウカ	△	△	△	△	◎	早	やや多
	イネドロオイムシ	△	△	△	△	△	早	少
	斑点米カメムシ類	□	□	□	◎	◎	早	多
	イネミギワバエ	△	△	△	△	△	早	少
フタオビコヤガ	△	△	△	△	△	早	少	
秋まき小麦	赤さび病	◎	□	◎	◎	□	早	多
	うどんこ病	□	□	□	□	□	並	並
	眼紋病	△	□	◎	◎	◎	—	並
	赤かび病	△	□	△	△	△	—	並
春まき小麦 (春まき)	赤かび病	△	□	△	△	△	—	並
	ムギキモグリバエ	◎	◎	◎	□	□	早	やや多
春まき小麦 (初冬まき)	赤かび病	△	△	△	△	△	—	並
	ムギキモグリバエ	△	□	◎	◎	◎	早	やや多
大豆	べと病	△	□	□	△	△	やや早	やや少
	わい化病	△	△	△	◎	◎	—	やや多
	マメシンクイガ	△	△	△	△	△	早	並
	食葉性鱗翅目幼虫	△	△	□	□	□	早	並
	タネバエ	□	□	□	◎	□	—	並
小豆	菌核病	△	△	△	△	△	やや早	やや少
	灰色かび病	△	△	△	△	□	やや早	やや少
	茎疫病	△	□	△	△	△	—	並
	食葉性鱗翅目幼虫	△	□	◎	□	□	早	並
菜豆	菌核病	△	□	△	△	△	やや早	やや少
	灰色かび病	△	□	△	△	△	やや早	やや少
	黄化病	△	△	△	□	△	—	並
	タネバエ	△	□	□	△	□	—	並

作物名	病害虫名	近年の発生状況					本年の発生期・発生量	
		R3	4	5	6	7	発生期	発生量
ばれいしょ	疫病	△	□	△	△	△	並	やや少
	軟腐病	△	□	◎	□	□	—	並
	黒あし病	△	□	□	□	□	—	並
	そうか病	◎	△	◎	◎	□	—	並
	粉状そうか病	△	□	△	△	△	—	並
	アブラムシ類	△	△	△	△	△	早	並
てんさい	褐斑病	△	◎	◎	◎	◎	早	多
	根腐病(黒根病含)	△	△	△	△	△	—	並
	黄化病	△	△	△	△	△	—	少
	ヨトウガ (第1回)	□	△	◎	□	◎	早	やや多
	ヨトウガ (第2回)	△	△	◎	◎	◎	早	やや多
たまねぎ	白斑葉枯病	△	△	△	△	△	やや早	並
	軟腐病	△	◎	◎	△	△	—	並
	乾腐病	△	△	△	△	△	—	並
	ハエ類(タマネギハエ、タネハエ)	□	□	◎	△	△	—	少
	ネギアザミウマ	□	△	◎	△	◎	早	多
	ネギハモグリバエ	△	△	△	△	△	早	やや少
だいこん	軟腐病	△	□	◎	□	□	—	並
	キスジトビハムシ	◎	△	◎	△	△	—	並
あぶらな科 野菜 ^{注2)}	コナガ	□	△	△	△	◎	早	やや多
	ヨトウガ	□	△	△	△	△	早	やや多
りんご	モニリア病	△	△	△	□	□	並	少
	黒星病	△	△	△	△	△	やや早	並
	斑点落葉病	△	□	△	△	△	やや早	並
	腐らん病	◎	◎	◎	◎	◎	—	多
	ハマキムシ類	◎	△	△	△	△	早	少
	モモシンクイガ	△	△	□	□	□	早	並
	ハダニ類	◎	△	△	△	△	早	並
	キンモンホソガ	□	□	△	△	△	早	並

令和8年度に多発が予想される病害虫

1. 水稻の紋枯病

紋枯病（疑似紋枯症を含む）は高温多湿で多発しやすい。本年は夏季の気温が高いと予報されており、昨年多発した地域では伝染源も多くなっていると推測され、注意が必要である。窒素肥料の多用を避けると共に、前年に発生が確認されたほ場では出穂前の薬剤散布を実施する。

2. 水稻のヒメトビウンカ及び縞葉枯病

縞葉枯病はヒメトビウンカにより媒介される。ウイルス保毒虫率が高いほど、また、本種の発生量が多いほど、縞葉枯病の発生は多くなる。本年のヒメトビウンカ発生量は、前年の発生量がやや多かったことから、平年よりやや多いと予想され、一部地域では前年の保毒虫率が高かったことから、注意が必要である。縞葉枯病常発地域においては媒介虫をおさえるためウンカ類に有効な箱施用剤を使用する。箱施用剤を使用できない場合は、移植後から6月上旬に水面施用剤または茎葉散布剤での防除を実施する。道外では、イミダクロプリド剤およびフィプロニル剤に抵抗性を持つヒメトビウンカ個体群が確認されている。前年に薬剤の防除効果が十分に得られなかった場合には、本年は他の系統の薬剤に変更することを検討する。

3. 水稻の斑点米カメムシ類

斑点米カメムシの主要種であるアカヒゲホソミドリカスミカメは出穂期頃に成虫が畦畔から本田に侵入し、成虫および幼虫が穂を加害して斑点米被害を生じさせる。高温少雨条件では、本田への侵入、増殖、加害が活発になる。アカヒゲホソミドリカスミカメ及び道南地方のアカスジカスミカメの前年の発生量は平年より多かったことから、越冬密度も平年より高いと推測される。本年は暖候期（6～8月）の気温は平年より高く、降水量は平年並と予報されているため、本田への侵入は早く、発生量および被害は多くなるものと予想される。薬剤防除にあたっては出穂期の基幹防除が重要であり、多発時は適切な散布間隔での追加防除が必要である。

4. 小麦の赤さび病

赤さび病は高温多照で多発しやすい。本年は4月の気温が平年より高いと予報されている。そのため、本病の発生に好適な条件となり初発時期が平年より早くなると予想される。また、5月および6月の気温も平年より高いと予報されていることから発生量は多いと予想される。これまで本病の多発リスクが低いとされていた地域においても、前年の発生が多かった場合など、多発が懸念される場合には、多発リスクが高い地域を想定した防除の実施を検討する。本病に対する薬剤防除は、令和6年指導参考事項「多発傾向に対応した秋まき小麦の赤さび病防除技術」を参考に、効果が高く残効の長いインピルフルキサム水和剤Fあるいはフルキサピロキサド水和剤Fで1回目の散布を次葉展葉期～止葉期に行い、開花始めに2回目の散布として赤かび病にも効果的なキャプタン・テブコナゾール水和剤あるいはプロチオコナゾール水和剤Fを用いることで効率的に防除できる。

5. 春まき小麦のムギキモグリバエ

ムギキモグリバエは、幼虫が小麦の茎内に侵入、加害する。生育初期の加害では無効分げつが増加し、出穂直前の加害では白穂や傷穂被害となる。また、出穂前の加害では出すくみ被害により有効穂数が減少するが、被害に気が付きにくい。春まき小麦では、は種が遅くなる程被害が大きくなりやすい。前年は本種の被害が春まき栽培では平年並であったものの初冬まき栽培では平年よりやや多く、秋季も高温に経過した時期があったため越冬密度は高いと推測される。本年は融雪が早く進んでおり、また、春季の気温は平年より高いと予報されていることから、第1回成虫の発生は早いと予想される。春まき小麦では早期は種（4月は種）に努め、6葉期頃までに茎葉散布を実施する。初冬まき小麦でも近年被害が見られることから前年まで被害が認められた地域では春まき小麦に準じて防除を実施する。高温経過により小麦の生育が早く進む場合、防除適期を逸しないよう注意する。

6. 大豆のわい化病

本病のウイルスはジャガイモヒゲナガアブラムシによって永続的に伝搬される。春先の気温が高めに経過すると、本種の出現時期が早く発生量も多くなるため、本病が多発する傾向にある。本年は4月から6月の気温が平年より高いと予報されていることから発生量はやや多いと予想される。チアメトキサム水和剤Fの種子塗抹、および残効性のある殺虫剤を用いた茎葉散布により本病を防除する。なお、「タマフクラ」はチアメトキサム水和剤Fを単剤で種子塗抹すると出芽不良が顕著

になるので使用を避ける。

7. てんさいの褐斑病

褐斑病は7～8月が高温多湿な年に発生が多くなる。本年は暖候期（6～8月）の気温が平年より高く、降水量は平年並と予報されている。また、前年の発生量は平年より多かったことから、感染源が多いと推測される。このため本病の発生時期は平年より早く、発生量は平年より多くなると予想される。天候の推移に注意し、今後の予察情報等を参考に適切に防除を行う。計画した散布開始時期以前に発病が確認された場合には直ちに薬剤散布を開始することが重要である。また、チオファネートメチル剤、QoI剤、DMI剤およびカスガマイシン剤では道内広く耐性菌が発生しているため、薬剤の選択には注意する。薬剤散布にあたってはマンゼブ剤を基幹とし、散布開始は初発直後までに行う。薬剤の残効を考慮し適切な間隔で散布する（マンゼブ水和剤は14日以下、銅剤は7日以下）。耕種的対策（連作の回避、抵抗性“強”以上の品種を導入）に積極的に取り組む。なお、抵抗性“極強”品種では、発病株率が50%に達する前から8月下旬まで防除を実施することで、“強”品種の標準的な防除よりも発病を低く抑えることができる。

8. てんさい及びあぶらな科野菜のヨトウガ

本種幼虫の加害開始時期は、6月下旬から7月上旬頃（第1回）と8月下旬から9月上旬頃（第2回）である。前年、第2回の発生量は平年よりやや多かったことから、越冬密度はやや高いものと推測される。本年は融雪が早く進んでおり、春季の気温は平年より高く、降水量は平年並と予報されているため、第1回の幼虫発生期は平年より早く、発生量はやや多くなると予想される。また、暖候期（6～8月）の気温は高いと予報されていることから、第2回の幼虫発生期は早く、発生量はやや多くなると推測される。夏季高温年では夏季休眠により第2回成虫発生が9月にも認められ幼虫被害が遅い時期まで長引くことが危惧される。老熟幼虫に対しては薬剤の防除効果が劣るので、ほ場をよく観察し、早めの防除をこころがけるとともに、被害が長引く場合には追加の防除を実施する。

9. たまねぎのネギアザミウマ

ネギアザミウマは、高温で早発・多発しやすく、少雨で多発が助長される。本年は春季の気温は平年より高く、暖候期（6～8月）の気温は平年より高く、降水量は平年並と予報されているため、発生期は早く、発生量が多くなるものと予想される。本種に対する薬剤防除は、適切な時期に開始すること、適切な防除間隔で効果の高い薬剤を使用することが重要である。たまねぎでは通常6月上旬以降に防除を開始するが、発生期は早いと予想されるため、被害が確認された場合には早くから防除を開始する。また、ピレスロイド剤抵抗性系統が道内の広い範囲で確認されており、他系統薬剤に関しても連用多用は避け、異なる系統の薬剤によるローテーション防除を徹底する。

10. あぶらな科野菜のコナガ

コナガは道内では越冬が困難なため、春季に道外から飛来する個体群が発生源となる。本年は春季の気温が高いと予報されているため、第1回の幼虫発生が早くなると予想される。また、暖候期（6～8月）の気温は平年より高く、降水量は平年並と予報されているため、密度が急激に高まるおそれがあり注意が必要である。近年ジアミド剤感受性低下個体群の飛来が確認されているものの、本系統剤の使用をコナガの世代内に1回以内とすることで感受性低下リスクを管理できる。適正な使用間隔の目安については令和5年指導参考事項「ジアミド系薬剤感受性低下個体群に対応したキャベツにおけるコナガの防除対策」を参照する。なお、抵抗性が発達することのないように異なる系統の薬剤によるローテーション防除を徹底する。

11. りんごの腐らん病

腐らん病は発病部位から病原菌の胞子が分散し感染する。近年発生が多い状況が続いており、発病部位が多く、胞子の分散も多いと推測される。このため本病の発生量は引き続き多いと予想される。伝染源を除去するために、発病部位を見つけ次第、削り取りや切り落としを行う。削り取り等で出来た傷口が病原菌の侵入口となるため、殺菌剤入り塗布剤を塗布する。春先には休眠期防除を実施する。さらに、摘果期にも樹冠散布を行い果台感染による枝腐らんの予防を行う。樹勢が弱ると感染しやすくなるため、樹勢を維持するために適切な栽培管理を行う。